

研究

福島第一原子力発電所事故を巡る、 被災した子育て家族の生活再建の過程

宍戸 路佳¹⁾，久保 恭子²⁾，坂口由紀子³⁾

〔論文要旨〕

福島原発事故で被災した子育て家族の生活再建の過程を明らかにすることを目的とした。インタビュー調査を行い、M-GTA の手法を参考に分析した。結果、対象者は、放射線が及ぼす人体や次世代への影響、偏見や差別が強く影響をし、放射線に関する情報が不十分であったことに対して、不満や不信感があった。生活再建を支えた人として、災害初期の情報が混乱している時期から、祖母が一貫して、親の意思決定を尊重する態度を持ち続け支えていた。子育て家族は家族内のつながりを密にし、その家族なりの家族アイデンティティを形成していた。生活再建の有様を決めた要因は仕事の確保であった。

Key words : 福島第一原子力発電所事故, 被災家族の生活再建のプロセス, 祖母, M-GTA

I. はじめに

東日本大震災は地震による被害のみならず、津波、福島第一原子力発電所の事故（以下、福島原発事故）を受け、私たちは目に見えない放射線による健康不安を抱えて生活をしている。原子力発電所の事故については、1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故（以下、チェルノブイリ原発事故）が有名である。チェルノブイリ原発事故後、住民の健康に関する研究では、被災者全体の健康の悪化はないものの、低年齢児の甲状腺の異常や特定部位のがんのリスクが高いことが報告されている¹⁻³⁾。今回の福島原発事故とチェルノブイリ原発事故とは、放射線の被ばく量やその後の災害対策などが大きく違い、チェルノブイリ原発事故後のような健康被害は生じないと推測できる。しかし、両者とも原子力発電所事故という共通点だけで、私たちはあたかも同様の健康被害が生じるのではないかと

いう恐怖を抱くことがある。福島原発事故後、福島県民のみならず、日本国民の多くが、放射線が及ぼす人体への現在・未来への健康被害、生活への影響、子どもたちの成長・発達や社会的・心理的な影響、次世代への遺伝子レベルでの健康問題・社会的差別を懸念し、不安を増強させた時期があり、現在でも、そのような不安を抱えて生活をしている者もいるだろう。親は子どもの健康の維持増進と将来の幸福を常に祈っており、子どもの将来への不安は親の精神健康状態の悪化、親の危機的状況をも引き起こす可能性が大きい。私たち医療者は、子どもとその家族に対する長期的な支援が求められており、被災者の苦悩を軽減し、彼らのQOLの向上に寄与することは重要な使命である。本研究の目的は福島原発事故後、2年にわたる乳幼児をもつ被災した子育て家族の生活再建の過程を明らかにすることである。

Process of Rebuilding the Life for Family Raising Infant over a Period of Two Years Since Accident of Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant

Mika SHISHIDO, Kyoko KUBO, Yukiko SAKAGUCHI

1) 神奈川工科大学看護学部看護学科（助産師／研究職）

2) 神奈川工科大学看護学部看護学科（看護師／研究職）

3) 日本医療科学大学保健医療学部看護学科（看護師／研究職）

別刷請求先：宍戸路佳 神奈川工科大学看護学部看護学科 〒243-0203 神奈川県厚木市下荻野1030

Tel : 045-922-6349 Fax : 045-922-5642

〔2656〕

受付 14. 7.28

採用 15. 6.24

II. 研究方法

1. 調査期間

2011年5月～2013年1月。

2. 調査対象者

原発事故後、福島県内から県外に避難した子育て中の母親13名である。

3. 調査方法

インタビュー調査。インタビューの回数は1ケースに対して1～3回、時間は43分～2時間であった。1回目のインタビューは2011年5～7月、2回目が2012年3月、3回目が2012年10月～2013年1月であった。インタビューの内容は、原発事故から2年にわたり、家族の心理的・社会的変化や生活をするうえで困難であった点についてなど、自由に回答してもらった。インタビューはすべて筆者らが行い、インタビューの内容は許可を得てボイスレコーダーに録音した。

4. 分析方法

対象者の生活再建を構造的に明らかにするためにM-GTAの手法を参考に分析した。M-GTAは、現象がプロセス的な特性を持っている場合に有用であり、人々の相互行為を構造化し、実践理論の生成に有用な分析方法であるといわれており⁴⁻⁶⁾、今回の調査が家族間の関連性と被災、避難、生活再建までの過程（プロセス）を明らかにしたいことからM-GTAを参考に分析を行った。分析の手順として分析ワークシートを作成し概念の抽出、カテゴリー化を行い、関係性を図示した。分析にあたり、小児看護学、質的研究の専門家にアドバイスをもらい、信頼性、妥当性を高めた。

5. 倫理的配慮

研究の目的・方法を説明し、研究協力の有無にかかわらず不利益はないこと、同意を得られた調査対象者のみ回答を依頼すること、再度依頼時も同意を得て実施すること、研究終了後データは速やかに処分すること、結果を学会誌等で発表することを説明し、了解を得た。なお、本研究は著者らが所属していた埼玉医科大学保健医療学部研究倫理委員会で承認を得ている。

III. 言葉の定義

本研究における主要用語の操作的定義は以下の通りである。

子育て家族：養育者が家族と認識する集団で、家族成員に乳幼児が含まれる。

生活再建：東日本大震災によって変化した生活が、新たな生活状況に変化し、適応するまでの有様。新たな生活再建への状況の変化と家族の取り組み、新しい体制を構築する過程とする。

仕事：生計を立てる手段として従事する事柄とする。

IV. 結果

1. 対象者の概要

子育て中の母親20名、年齢は20～43歳であった。東日本大震災前は福島県内で生活をし、原発事故後、県外に避難した。避難理由として、強制避難、自主避難の両方が挙げられている。避難前は核家族であり、家族内で日常生活に支障のあるような健康障害等をもっている者はいない。

2. 分析の結果

福島県から県外に避難し、その後の生活再建までの過程、その過程を支えた力、生活再建の決断要因という視点から分析した。対象者が語った言葉を「」、著者による補足説明を（ ），当時の現状の説明を〈 〉、カテゴリーを【 】で示した。分析の結果、抽出したカテゴリーは11であった。まず、全体のストーリーラインを説明する（図）。

福島県外に避難を決定した要因は、【親（母親の母：以下、祖母）からの県外避難の強い勧め】であった。災害直後、情報の混乱やガソリン不足が続き、〈避難を切望するが、避難をする手段がない〉、〈災害から子どもたちを守るためには自分たちがどうするべきかわからない。行動が決められない〉、〈放射能に関する知識もないので避難するか迷った〉、〈夫は仕事優先の生活を変えず、避難に消極的である〉などの葛藤や混乱があったが、【放射線災害から子どもの健康を守りたいという願い】は親も祖母も同様であり、祖母から「とにかく福島から逃げなさい」という後押しを受けて、県外避難を決心した。また、避難の過程では、「若い者が逃げることができてよかった」という【祖母の支え】があった。一方、親は励ましてくれる祖

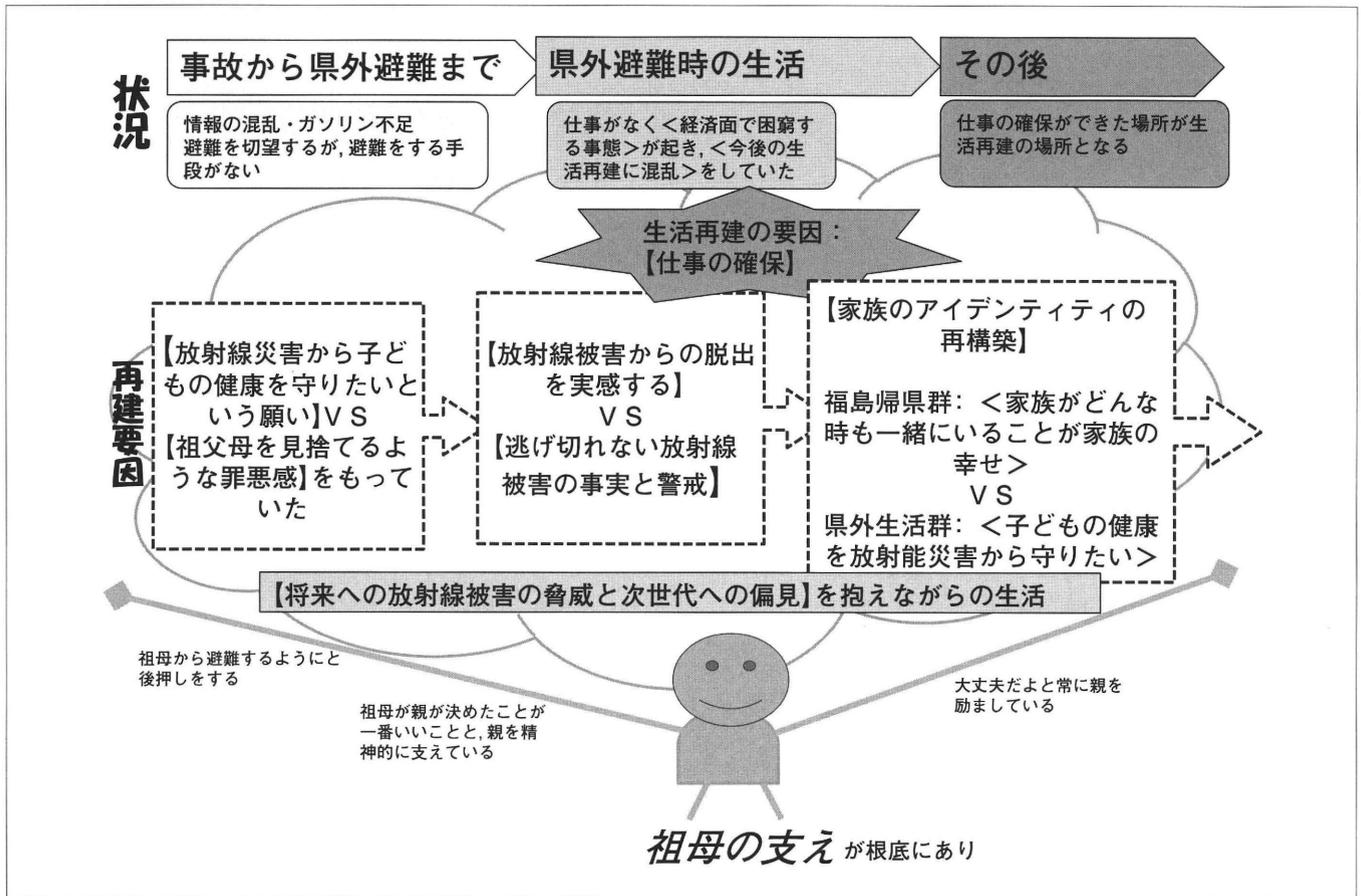


図 福島原発事故後、子育て家族の生活再建の過程

父母を残して県外に避難することで【祖父母を見捨てるような罪悪感】を抱いていた。県外避難後から、その後の生活再建を決定するまでは、＜自由に外出できる解放感＞、＜水や食品が近所のマーケットで購入できる安心感＞を得て、【放射線被害からの脱出を実感】する一方、＜福島ナンバーの車に乗っている人＝放射線の被害者＞という【逃げ切れない放射線被害の事実と警戒】を感じていた。また、仕事がなく＜経済面で困窮する事態＞が起き、＜今後の生活再建に混乱＞をしていた。生活再建を決定した要因は【仕事の確保】であり、福島で【仕事の確保】ができた家族は、＜家族がどんな時も一緒にいることが家族の幸せ＞と考え、県外で【仕事の確保】ができた家族は、＜子どもの健康を放射能災害から守りたい＞という、それぞれの家族の価値観を確認し合い、その家族なりの【家族のアイデンティティの再構築】を図っていた。この過程でも、祖母が「親が決めたことが一番いい方法である」と、親の決定をおおむね支持する【祖母の支え】があった。生活再建後の家族の様相では、県外での生活を選択した家族は【自分たちなりの福島とのつながり】を持ちつつ生活をしてきた。一方、福島へ戻った

家族は【私たちは実験用の鼠と一緒に】のようだという不満を持っていた。また、両者に共通して【将来への放射線被害の脅威と次世代への偏見】を感じていた。この時期も祖母が電話や訪問により、親を励ますなど、【祖母の支え】があった。それぞれの時期について詳しく説明をしていく。

i. 福島県外に避難を決定するまで

この過程では、【祖母からの県外避難の強い勧め】、【放射線災害から子どもの健康を守りたいという願い】、【祖母の支え】、【祖父母を見捨てるような罪悪感】というカテゴリーが見出された。

【祖母からの県外避難の強い勧め】では、「祖母が『孫が放射線で癌になったら困る。福島の人とは結婚しないなど（の差別や偏見があるように）言われると孫がかわいそう、安全なところに逃げなさい』と、強い口調と涙ながらの訴えがあった。私たち親も、やっぱり逃げないといけないと気持ちが変わってきた」などがあった。

【放射線災害から子どもの健康を守りたいという願い】では、「白血病などの病気になったら、子どもがかわいそう。本当に病気になると、（うちの子どもも）

例外はないと思った」,「情報が無いっていうことは、情報が出せないということ, それだけ深刻な健康被害が出るのではないかと疑った」などがあつた。

【祖母の支え】では,「報道で,放射線の影響で健康被害が心配されるから,外出は控えるようにと言っているのに,(祖母が)外出して,歩いて家まで来て,『早く逃げなさい。お金はなんとでもなるから』など,自分の健康被害も気にせずに,来てアドバイスをくれた。親の涙は初めて見たし,ぐずぐずしないで逃げないといけなと決心した」,「おばあちゃんが携帯電話のメールを練習して,大丈夫か?と何度もメールをくれた」などがあつた。

【祖父母を見捨てるような罪悪感】では,「自分たちだけ,避難するなんて。祖父母も一緒に避難させたい」,「避難できない人も大勢いるのに,後ろめたい」などがあつた。

ii. 生活再建を決定するまで

【放射線被害からの脱出を実感】,【逃げ切れない放射線被害の事実と警戒】,【仕事の確保】,【家族のアイデンティティの再構築】,【祖母の支え】があつた。

【放射線被害からの脱出を実感】では,「避難して窓が開けられる。外出時にマスクをしないで出られることは幸せだった」,「福島からちょっと出たら,おむつとか牛乳がドラッグストアで売っている。ほっとした。当時の福島は何も売ってなくて,あの時を思い出すと,地獄だと思った」などがあつた。

【逃げ切れない放射線被害の事実と警戒】では,「すでに子どもも私たちも被曝しているかもしれないという漠然とした不安があつた」,「福島ナンバーの車を見て嫌な顔をされた」,「放射能を撒き散らすと言われた」などがあつた。

【仕事の確保】では,「避難中は夫の仕事がなく,生活が苦しい」,「これから先,どうやって生活をしているのか,夢中で逃げたけど,さてこれから先どうするのか,決められない」,「知らない土地で仕事を探すのも難しい」などがあつた。仕事の確保に関する語りでは,「夫の会社が再開するから帰って来いと言われた。でも,福島はまだ水道もガスも復旧していなかったので,夫が一人で帰っても生活ができない。二重生活を続けるお金もない。なので,夫の世話が目的で,家族全員で福島に帰りました」があつた。一方で,「福島に帰っても仕事がない」,「会社が他県の支社に(夫を)移動させてくれた」,「福島県と避難先の県の支援を得

て,職業訓練校に行くことになった。なんとか1年間,生活をするだけの保障もあるので,新しい土地(避難先)で生活をする」があつた。

【家族のアイデンティティの再構築】では,「ずいぶん喧嘩もしたけど,夫とどんなことがあっても家族と一緒に生活しようと提案した。死ぬ時は家族みんな一緒に生活しようかんじになって。結局みんな一緒に福島に帰りました」,「(福島に)帰るか否かずいぶん悩んで喧嘩もしたけど,将来,あの時,なんであんなに神経質になったのかね,って笑って福島に帰ってもいいから,今は新しい土地で生活をしていこう。今,子どもの健康にとって一番いいことを選択しようと,夫と意見が合った」があつた。

【祖母の支え】では,「祖父母は孫がいなくてさみしいと言うが,でも(放射線のことがあるから)帰ってくるなとも言う。親が県外で生活すると決めたらそれでいい。祖母は,私たちに仕事を県外で見つけるようにアドバイスをしてきた」,「政府が福島は安全って言っているのだから大丈夫だろう。きちんと健康診断を受けて生活をしていけば,福島で生活しても大丈夫」,「ローンの支払い方法,今後の生活の仕方など,いろいろと教えてくれた」などがあつた。

iii. 再生活後の家族の様相

【自分たちなりの福島とのつながり】,【私たちは実験用の鼠と一緒に】,【将来への放射線被害の脅威と次世代への偏見】,【祖母の支え】があつた。

【自分たちなりの福島とのつながり】では,県外での生活を選択した人たちの意見であり,「福島では親がそばにいたので,生活全般頼っていた。今は自分たち夫婦で何とかやらないと,と親への甘えが少なくなった」,「福島が気になる。親孝行もしたい。なるべく頻回に福島に帰るようにしている。孫の顔を見せることが一番の親孝行である」などが語られた。

【私たちは実験用の鼠と一緒に】では,福島に戻った人たちの意見であり,「結局のところ,放射線の健康被害(特に低被曝)ははっきりしない。政府もわからないのだろう」,「結局,私たちがどうなるか(どんな健康被害が出るのか,出ないのか)を試している」,「薬とかの開発に使われる鼠と私たちは一緒に」などの<人体実験の材料となっている>などがあつた。

【将来への放射線被害の脅威と次世代への偏見】では,「結婚する時に,福島人は,放射線汚染で,遺伝子が壊れているから,結婚したらダメとか言われる

のではないかと奇形が生まれると困る」, 「○○地域で内部被曝をしている人が見つかったらしい。うちは大丈夫かと心配になる」, 「もっとたくさん、健康診断をしてほしい」, 「放射線は健康に害がないかもしれないけど、より健康になるわけではないのだし、放射線はないほうがいいに決まっている」があった。

【祖母の支え】では、「祖父母らが家の中に、子ども部屋を作ってくれた(室内の遊び場を整えてくれた)」、「長期休みに福島県外への旅行を推奨してくれる」、「いつも大丈夫だよ、なんとかなるからと励ましてくれる」などがあった。また、他県で生活をしている対象者からは、「おばあちゃんが時々電話をしてくれる。お金は大丈夫?とか、困っていないかとか。大変だったらいつでも手伝いに行くと言ってくれる」があった。

V. 考 察

生活再建の有様を決断した要因は仕事の確保であった。対象者らは子育て期であり、生活費、子どもの教育費など多額の生活資金が必要であり、対象者の年齢をみても20~30代と若く、労働力として欠かせない人材である。経済力がなければ、生活は成り立たない。父親の仕事が確保できた場所が彼らの生活再建の場所となり、その家族なりの有様を見つけ出し、<その家族なりのアイデンティティを形成>していた。結果の中で、<夫は仕事優先の生活を変えず、避難に消極的である>ということや、「ずいぶん喧嘩もしたけど〜」という語りがあるように、家族内での意見の相違、亀裂もみられたが、意見を摺り合わせ、折り合いをつける過程を経ながら、生活再建の基盤作りを行い、家族の絆をより深めていることがわかる。家族アイデンティティの確立には、家族の絆が基盤となり、家族の意義を家族員が家族生活の中で見直し、家族への愛着や絆意識、帰属感を強め、家族の存在が安定していくとあり⁷⁾、本研究も先行研究の結果を支持している。また、生活再建に向けて、①住まい、②仕事、③暮らし向き(お金)、④つながり、⑤心と体、⑥行政、⑦将来への備え、という要素があることが報告されている⁸⁾。今回の結果も、生活再建の過程で、仕事の確保[暮らし向き(お金)]をして、住む場所を決定[住まい]していた。また、この移行では、祖母の支えや家族のアイデンティティの構築[つながり]がみられた。放射線による健康被害の影響という[心と体]の問題、十分な情報発信が得られなかったという政府への不満[行

政]、放射線の次世代への影響、偏見や差別など[将来への備え]に関する項目も関与していることがわかる。

本調査の結果から、新たに明らかになったことが二点あると考える。

一点目は、放射線が及ぼす人体への影響について、十分な情報が得られなかったこと、自分たちの健康を阻害する情報を政府が隠していると感じていたことが、現在、政府から報告されている「放射線の被害はほとんどない」という報道についても疑心暗鬼の状態であり、【私たちは(放射線災害後の)実験用の鼠と一緒に】、【将来への放射線被害の脅威と次世代への偏見】を持ち続けていることである。専門家らが一定の指針として出した「今回の放射線災害による健康被害はない。安心してよい」という報道にさえ、安堵できないような精神状態に陥っていることは大きな病理である。今後の課題として、被災者へ、放射線に関する科学的データに基づいた正しい情報の提供とともに、「健康被害がない」という客観的な情報が得られ、実感できるように、住民の健康診査や心理的なフォローの継続が重要である。【将来への放射線被害の脅威と次世代への偏見】についてであるが、日本は原発大国である。医療者をはじめ、すべての国民が放射線に関する正しい知識を得ることにより、偏見や差別意識をなくす必要がある。

二点目は、生活再建を支えた力として【祖母の支え】があり、祖母は常に「親が決めたことは家族にとって一番いいことである」と、家族の最終決定を支持していた。エリクソンは壮年期、老年期の課題として、次世代を支える子どもを育み、社会的に役立つアイデアを生み、育てていく積極的な関与があることを報告している⁹⁾。また、やまだ¹⁰⁾は、日本人の母娘関係について、「入れる」、「入れ子」、「包む」と表現しており、日本ではいつの年代になっても、母親が子どもを守る、助けるという文化があることを報告している。災害後しばらくの間、情報が混乱し、放射線災害から健康を守るためにどうすべきなのか、何が一番いいことなのか、誰にも判断がつかなかった。このような中、祖母が母親の気持ちを察し、母親の決定を一貫して支持したことで、母親は行動するための勇気となり、親の葛藤や不安を軽減させることに役立っていたと考える。今後、危機的な状況にある子育て家族を支えるために、祖母を含めた拡大家族を視野に入れた多様で複合的な支援体制を考えていく必要がある。

VI. ま と め

本研究から以下の点が明らかになった。

1. 被災した子育て家族の生活再建を決定した要因は仕事の確保であり, 生活再建の過程において, 被災家族はその家族なりの家族アイデンティティを形成していた。
2. 生活再建の過程を支えた人は祖母であった。
3. 被災家族の生活再建の過程は, 放射線への脅威・放射線への苦悩に満ちたものであり, 今後, すべての国民が放射線に関する正しい知識を得ることにより, 放射線被害への偏見や差別意識をなくす必要がある。

最後に本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は平成22～25年度文部科学省科学研究費補助金(課題番号22390414) および平成24～26年度文部科学省科学研究費補助金(課題番号24792412)の助成を受けた研究の一部である。また, 本研究の一部を第54回日本母性衛生学会学術集会において発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 柴田義貞. チェルノブイリ原子力発電所事故から20年. 長崎医学会雑誌 2006; 81: 149-156.
- 2) 寺島東洋三. チェルノブイリ原子力発電所事故の健康影響. 保健物理 1991; 26 (4): 361-366.
- 3) ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害対策局. ベラルーシ報告書. 産学社 2013; 35: 171.
- 4) 木下康仁. グランテッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—. 東京: 弘文堂, 2003.
- 5) 木下康仁. ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グランテッド・セオリー・アプローチのすべて. 東京: 弘文堂, 2007.
- 6) 木下康仁. 修正版グランテッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法. 富山大学看護学会誌 2007; 6 (2): 1-10.

- 7) 法橋尚弘, 樋上絵美. 現代家族の家族アイデンティティ. 法橋尚弘. 新しい家族看護学 理論・実践・研究. 東京: メジカルフレンド社, 2010: 2-4.
- 8) 兵庫県. 生活復興調査 調査結果報告書. <http://web.pref.hyogo.lg.jp/wd33/documents/000043904.pdf#search='%E7%94%9F%E6%B4%BB%E5%86%8D%E5%BB%BA%E3%81%AE7%E3%81%A4%E3%81%AE%E8%A6%81%E7%B4%A0'>: 2014年4月30日引用
- 9) Erikson, 朝長正徳, 朝長梨枝子訳. 老年期—いきいきしたかかわりあい. 東京: みすず書房, 1990: 78-110.
- 10) やまだようこ. 私をつつむ母なるもの. 東京: 有斐閣, 1988: 23-33.

〔Summary〕

This study aimed to clarify the life rebuilding process for families with infants after suffering from the accident of the nuclear power plant. For this purpose, an interview survey was conducted and the data was analyzed in accordance with the M-GTA. The results showed that the subjects have been annoyed at prejudice and discrimination about the effect of radiation on the human body and the health of the next generation. At the same time, they have been dissatisfied with lack of information about radiation. The interviews revealed that it was grandmother that has supported the reconstruction of family's life by consistently respecting parents' decisions from the initial stage where so much information was conflicting immediately after the disaster. The families raising infants have tried to strengthen the internal bond of family to form their own family identities. The decisive factor in rebuilding the life was found to get an employment.

〔Key words〕

accident of Fukushima daiichi nuclear power plant, process of rebuilding the life for family, grandmother, M-GTA